

只今演奏会本番直前

シティオケの「春まち」も今週末に迫ったことですし、今日は演奏会当日のお話をしましょう。

オーケストラは演奏する曲によりその規模が変わりますが、数十人から場合によっては百人を超える人が集まります。さて、その中で、演奏会当日一番のりで現地にやってくるのは一体誰？

それはステマネと呼ばれる人です。正式にはステージ・マネージャーといい本番の6時間ほど前にやって来て、演奏会の準備をする人のことです。その仕事内容は多岐にわたり、椅子や譜面台という文字通りステージ上のことはもちろん、楽譜の用意、時には楽器の手配もします。また、楽屋の準備にソリストの接待、コンサートに係ることはすべてステマネのお仕事になり得ます。

ステマネの御膳立ての済む頃、団員達が集まってきます。彼らは楽屋に入ると、やおら楽器を取り出し、その日の演目をさらい始めます。弦楽器奏者は危険な箇所を何度も繰り返し練習します。ただし、コントラバスは狭い楽屋では迷惑がられ、すでにステージに追いやられています。木管楽器の中にはリード（楽器の吹き口に取り付けて震えることで音を作る部分）を削り、調子を確認している奏者もいます。金管楽器は冬場の公演だと凍てついた楽器を温めるのに一苦労かも知れま

せん。打楽器の人は舞台に並んだ太鼓の皮の張り具合を均一にすることに余念がないでしょう。

そう、これらが「音出し」と呼ばれる時間です。

やがて、指揮者が台上に現れると、いよいよリハーサルの始まりです。

演奏会当日のリハーサルはドイツ語でゲネラル・ブローベ（総合稽古）と言われ、これを略して「ゲネプロ」という業界用語が日本で生まれました。英語では一あまり聞きませんがガードレス・リハーサルと言うこともあります。衣装を着た通し練習という意味です。実際には普段着ですが、たまに、着替えるのが面倒くさい(?)ので、昼間からタキシードを着ている人もいます。

本番2時間前、ゲネプロが終わると休憩。食事をとって一服し、本番の衣装に着替えます。まれに、「蝶ネクタイ忘れた！」なんていう間抜けな声が聞こえてきたりします。正面を向いている奏者なら観客にもばれないので、こっそり紙を切り抜いただけの蝶ネクタイをつけたトランペット吹きが極まれにいたりもします。

さて、本番前。最初のベルで、団員が舞台袖に並び始めます。二度目のベルが鳴ると、ステマネの「お願いします！」の合図で、団員達がまばゆいステージに出陣して行きます。

みんなが揃うとチューニング、つまり音合わせの時間です。オーボエの「ラ」の音を基本に各自

が楽器の調子を合わせます。

オーボエは管楽器の中で最も管が細く、温度による音程の狂いが少ない、また音がよく通るなどの理由から、オーケストラの基準とされるのですが、それにしても何故「ラ」の音なのか？

これにも諸説ありまして、まず、ちょうど人間の可聴域の真ん中辺りにある音であるということ。また、イタリア語でこそ「ラ(La)」と言いますが、英語やドイツ語では「A」、つまり、始まりの音であるということ。困みに、日本語ではこの音を「イ」といいます。イロハの「イ」です。それから、西洋ではこの「ラ」の音は「愛の音」なのだということなどなど……。

チューニングのお話は又の機会に譲るとして、そうこうするうちにも指揮者が入場し、曲が始まりそうです……ほら、会場に熱気が……あら、紙面がなくなってしまいました。続きは2月20日午後2時、春まちコンサートの会場で……。